

プログラム・ノート

山田治生

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第1番 変ホ長調 作品12

フェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)は、ハンブルクの裕福なユダヤ系の家庭に生まれ、早くから音楽への才能を示した。弦楽四重奏曲も少年時代から習作を残す。その第1番は、第2番(1827年作曲)に続いて1829年に作曲された。

第1楽章：アダージョの序奏に続いて、アレグロの主部に入り伸びやかな第1主題が示される。**第2楽章：**作曲家らしい軽快でエレガントな短調の音楽。**第3楽章：**第1ヴァイオリンが広い音域を使って自在に歌う。**第4楽章：**短い序奏に続いて第1ヴァイオリンが第1主題を提示する。最後に第1楽章第1主題が回帰し、第1楽章と同様の終わり方をする。

ベン=ハイム：弦楽四重奏曲第1番 作品21

パウル・ベン=ハイム(1897～1984)は、ドイツ出身のイスラエルの作曲家。ドイツ時代の名前はパウル・フランケンブルガー。ドイツの後期ロマン派の流れをくみながら、ドビュッシーやラヴェルの影響も受ける。ユダヤ系ゆえにナチスを逃れ、1933年、パレスチナに移住。苗字をベン=ハイムに変える。移住後、作品にユダヤの民族的な要素を取り入れる。弦楽四重奏曲第1番は、1936年に結成されたパレスチナ管弦楽団(現在のイスラエル・フィル)のメンバーのために、1937年に書かれた。

第1楽章：冒頭、ヴィオラが朗々と第1主題を歌い始める。第2主題は第2ヴァイオリンが提示する。**第2楽章：**スケルツォ的楽章。冒頭、ヴィオラがC線(最低弦)で鋭いリズムの動機を奏でる。中間部は穏やかでレガートな音楽。**第3楽章：**最初に第1ヴァイオリンによって提示される歌謡的な主題が変奏されていく。**第4楽章：**冒頭に提示されるロンド主題はユダヤ色が感じられる。ロンド主題の間に2つの副主題が挟まれる。

ドヴォルジャーク：ピアノ五重奏曲第2番 イ長調 作品81

アントニン・ドヴォルジャーク(1841～1904)のピアノ五重奏曲には、1872年作曲の第1番と1887年作曲の第2番があるが、一般的に「ドヴォルジャークのピアノ五重奏曲」と呼ばれているのは後者である。彼の交響曲第7番と第8番の間にあたる円熟期の作品。作曲者特有の旋律の美しさとボヘミアの民族的な魅力に満ちている。

第1楽章：チェロが朗々と第1主題を歌い、哀愁漂う第2主題をヴィオラが提示する。**第2楽章：**「ドゥムカ」(スラヴ民謡の一種)と名付けられ、悲哀を帯びた音楽。**第3楽章：**快活で、中間部が夢見るように美しい。**第4楽章：**民俗舞踊のステップを思わせる軽快な音楽。